

# テアル構文の動詞構成

## －存在文との近さから－

神永正史

キーワード：テアル構文、場所二格句、存在表現、単独他動詞文

### 要 旨

現代日本語のアスペクト助動詞「てある」（以下テアルとする）を用いた「～テアル」の文が、意味的に存在文に近いことは幾つかの先行研究でのべられている。しかしながら、この両者の近さは全てのテアル文で一様というわけではなく、テアルに上接する動詞によって異なっているようである。本稿はテアル文のテアルに上接する動詞を、その語彙特徴から分類し、分類した動詞で構成されるテアル文毎に存在文との「近さ」を比較することにより、この近さの程度の違いをみていく。また、このことによって、テアル文の全体的特徴を明らかにすることを試みる。

### 0. はじめに

現代日本語のアスペクトを表す補助動詞のうち、存在動詞と関わるものとしては、テイルとテアルの2つがある。テアルはテイルと比較すると、上接する動詞、および主語、目的語としてとる名詞に制限があり、また、表現される意味領域も狭い。

「～テアル」で表わされる構文（以下「テアル構文」とする）は、全体としては意志的行為の結果状態である「結果相」を表す表現であるが、個々のテアル構文をみると、形態的、意味的に異なる幾つかの類型がみられ、上接する動詞も類型毎に異なる。

テアル構文は統語的には2つに分かれる。1つは格助詞「ガ」（主格）で示された動作行為の対象が主語として示されるものであり（以下このような構文を「ガ格テアル構文」とする）、もう1つは格助詞「ヲ」（対象格）で示される行為の対象が

目的語として示されるものである（以下このような構文を「ヲ格テアル構文」とする）。テアル構文についての多くの先行研究（高橋 1969、吉川 1973、森田 1977、杉村 1996 など）の範囲は、この統語的分類に意味の異なりを見出し、各々の意味類型を導く典型的なテアル上接動詞を列挙するというところに留まっている。益岡 1987 は、この統語的分類（「ガ格テアル構文」と「ヲ格テアル構文」）を、構文表現の意味の違いによりさらに細分化し、細分化した個々の類型毎に上接動詞を分類している。本稿では、最初に、実際のテアル構文の上接動詞を分類するが、その際分類は、益岡 1987 でのべられている動詞分類をモデルとし、これを用例の実態に即して論者なりに変えたものを用いる。次に、分類された動詞毎のテアル構文と存在文との「近似性」（＝「近さ」）をみていく。

資料としてCD-ROM版『新潮文庫の100冊』（1995 新潮社）を用いる。

論の展開としては、1で益岡 1987 のテアル構文の類型および類型毎の上接動詞を紹介し、2で動詞毎の例文の分類を行い、テアル構文の内容実態を数字的に示し、3で存在文の特徴についてのべ、4で各動詞類のテアル構文と存在文との近似性についてみていく。最後に5で本論をまとめる。

## 1. テアル構文の類型

### 1. 1. 益岡1987によるテアル文の類型

益岡 1987 ではテアルに上接する他動詞類型を統語的、意味的観点から次のように大別している。

A型：「対象」の役割を担う名詞句（典型的には非情名詞）がガ格をとり、「動作主」は表面には現れない。

対象の変化の結果状態が視覚でとらえられる形で存続していることをす。

B型：動作主がガ格の位置を占め、A型のような受動型ではなく能動型のもの。

動作主による行為の結果事態が、何らかの意味で基準時に関与することを表す。

益岡 1987 ではさらにこの2型を以下のように細分している（例文は全て益岡 1987 から）。

A1型：行為の結果もたらされる、対象のある場所での存在を描写する。

「配置動詞」とでも呼ぶべき動詞（「置く」「並べる」「飾る」「のせる」「掛ける」「貼る」「敷く」「止める」など）が中心となる。

(1) 飲みかけのコーヒー茶碗が、受け皿から離れて置いてある。

A 2 型：行為の結果もたらされる、対象の何らかの状態の存続を描写する。

「状態変化動詞」（「折る」「磨く」「あける」「消す」「洗う」「あたためる」「灯ける」「揃える」など）が中心となる。

(2) 入り口に近い片すみが一畳余りの広さだけあけてある。

B 1 型：行為の結果もたらされた事態が、基準時において引き続き存在しているという、「結果の事態の存続」の意味を表す。

行為のおこなわれた時点を表す副詞句の生起を許容しにくい。

「状態存続動詞」とでも呼ぶべきもの（「預ける」「選ぶ」「確保する」「残す」など）が中心である。

(3) 業行は自分が写した経巻類をまだ相当量各地の寺々に預けてあり・・・。

B 2 型：行為の結果が基準時において何らかの有効性を示すことを表す。

行為のおこなわれた時点を表す副詞句の生起を許容する\*1。

動詞は「基準時における有効性」を示すもの（「贈る」「指示する」「たのむ」「（伝えるの意の）言う」など）であればよい。

(4) 笠井は、これまでに、チョコレートに入れて、金の指輪やネックレス、プレスレットなどを、彼女に贈ってある。

なお益岡 1987 には、次のような A 2 型と B 1 型の中間型も存在するとのべられているが、本稿ではこれを B 1 型の派生形（対象格が本来のヲからガに代わったもの）として扱う。

(5) そのお金がそっくり残してあるのよ。

## 1. 2. 論者の動詞分類

論者の動詞分類は、上記の益岡 1987 の 4 類型（A 1、A 2、B 1、B 2）に現れる動詞類を基本とするが、次の 4 点で異なっている。

①益岡 1987 では「書く」「用意する」などに代表される、特定の場面に新たに出現する動詞類が含まれていない。用例が多数見られたこれらの動詞を仮に「出現動詞」とし、A 2 型の状態変化動詞とは異なるものとして、A 1 型の 1 つの

---

\*1 益岡 1987 における B 型構文の「時の副詞句」との生起可能性の例文を示す。

・？業行は自分が写した経巻類を昨年末各地の寺々に預けてあり、・・・（B 1 型）

・笠井は、昨年末チョコレートに入れて、金の指輪やネックレス、プレスレットなどを、彼女に贈ってある。（B 2 型）

動詞類として設定した。

テアル構文での出現動詞は、4でのべるように、場所二格句との共起の点で、同じA 1型に属する配置動詞とは数的に異なった状況を見せる<sup>2</sup>。

- ②益岡 1987 でのべているA 2型の状態変化動詞は、具体的には対象の質的・形状的变化を指しているものなので、他の状態変化動詞と区別するため、これを仮に「質的・形状的变化動詞」という呼称に改めた。
- ③益岡 1987 ではヲ格テアル構文のB 1型に属する動詞を「状態存続動詞」とし、(注において)この中にA 1、A 2型動詞も含むとしているが、益岡が状態存続動詞として具体的にあげた動詞はこれら2つの動詞類とは意味的にも統語的にも異なったものに思えるので、この具体的に挙げた動詞類のみを状態存続動詞とし、他はガ格テアル構文からの派生形(対象格が本来のガからヲ格に代わったもの)とみなした。
- ④益岡 1987 ではB 2型に属する動詞は「基準時における有効性」を示すものであればよいとのみのべているが、益岡が具体的にあげたB 2型に属する動詞は、明らかに他の型の動詞類とは意味、統語の面で異なったものに思える。これらの動詞は、対象に対してなんらかの処置・対処を施す意味のもので、これを仮に「処置動詞」とする。またこの派生形(対象格が本来のヲからガ格に代わったもの)の存在も認める。

### 1. 3. A型動詞と「変化」との関係

益岡 1987 では、A型は(非情物である)対象の変化の結果状態を示すとしている。ここでいう「変化」とは、動作主の行為により、対象がなんらかの形で被った変化を指すものである。本稿ではA型動詞を、配置動詞(「置く」「並べる」など)、出現動詞(「書く」「用意する」など)、質的・形状的变化動詞(「干す」「裂く」など)に分けたが、この変化という観点から本稿で設けたA型動詞をみってみる。まず、配置動詞は対象の移動による位置変化を意味するものであり、次に、出現動詞は対象の場面への新たな出現による一種の状況変化を意味するものである。また、質的・形状的变化は対象の属性変化を意味するものである。このように本稿で扱うA型動詞は、全て変化という概念を含んでおり、これらの動詞が上接するテアル構文は、

---

2 本稿の調査では、配置動詞のテアル構文の66.8%が場所二格句を含むのに対し、出現動詞のそれは46.3%にとどまっている。

益岡 1987 のいう「対象の変化の結果状態」を表すものといえる。

#### 1. 4. B型動詞と「変化」の関係

一方、B型動詞であるが、状態存続動詞（「残す」「預ける」など）は配置動詞と同じ位置変化動詞の性格をもつが、テアル構文では対象がヲ格をとる点で、A型動詞とは統語的に異なっている。この動詞のテアル構文は「結果事態の存続」を表す。処置動詞（「(手を) 打つ」「まかす」など）は、これ以外のテアル上接他動詞が、行為対象自体に何らかの変化を被らせることを主眼としたものであるのに対し、この動詞は動作主の意図する行為の遂行それ自体を主眼にしたものであるといえる。この動詞のテアル構文は「基準時における有効性」を表す。

1. 3. ～1. 4. でのべた上接動詞の性格は、テアル構文の統語構造と意味に多いに関係するが、この件に関しては2. 4. でまとめる。

## 2. 動詞によるテアル構文分類

### 2. 1. 全体的傾向

資料としてCD-ROM版『新潮文庫の100冊』に収められている29人の日本人作家による長編22、短編59の計81作品（明治時代に書かれた作品、および外国文学、古典の翻訳ものは除く）より227の動詞が上接するテアル構文605例を採集した。例文は「～である（てあった）」の終止形の形のもののみを採取し、採取に際して、明らかに「本動詞＋受け身・使役助動詞＋テアル」の形であるものは、態（voice）の変化などによる意味の不明確化を避けるため採取しなかった。また「名詞ヲ（ガ）～スル」「名詞ヲ～ニスル」等の形で用いられるサ変動詞「す」は、自他の区別に問題があるので扱わなかった。

採取した例文の動詞のうち他動詞は221動詞でその用例は597例である。一方自動詞は6動詞、8例で\*3、全用例数の1.3%であった。本稿は他動詞のみを考察の対象とし、自動詞は扱わない。以下では他動詞についてのみのべる。

用例を調査してまず気づいた点に上接動詞と対象のとり格との複雑な関係がある。例えば配置動詞は対象がガ格をとるが、実際にはヲ格をとっているものが少数

\*3 決まる、判る（以上2例）、なる、入る、残る、生まれる（以上1例）。1例文を示す。

あの薬には曼荼羅華と草烏頭が仰山入ってあるのや。（華岡）

ながらみられる。それゆえ配置動詞を上接するテアル構文が全てガ格テアル構文を構成するわけではない。このような現象は他の全ての動詞類にみられる\*4。動詞毎のガ格、ヲ格の数については2. 3. でのべる。

まず、形態的な面からのべると、行為の対象がガ格で示されているものが264例(格表示された用例の77.6%)あり、行為の対象がヲ格で示されているものが76例(同22.4%)あった。またガ・ヲ格のかわりに助詞「ハ」や「モ」が用いられているものが93例、行為対象が無格であるもの、および、次例で示すように、ガ、ヲ、ハ、モ以外の助詞等が接続しているものが116例あった。

- (6) こういう立派な家って、放ってあると、あばら家よりよほど惨めたらしくなるものですね。  
(女社長)

その他文中に主語や目的が現れないものが48例あった。

このように実際のテアル文をみても、行為の対象がガ格、ヲ格で明示されている例文は340例で全体の57%であり、格表示されている例がされてない例よりも若干多い。

## 2. 2. 動詞毎の用例数

ここでは動詞毎の用例数についてのべる。配置動詞は86動詞、229例で全用例の38.4%を占める。出現動詞は35動詞、218例あり、全用例の36.5%である。質的・形状的变化動詞は、33動詞、42例あり、全用例の7%である。主にガ格構文をとる、配置、出現、質的・形状的变化動詞は合計154動詞、489例であり、全用例の81.9%を占める。状態存続動詞は8動詞、16例で全用例の2.7%である。処置動詞は59動詞、92例で全用例の15.4%である。主にヲ格構文をとる状態存続動詞、および処置動詞は合計67動詞、108例であり、全用例の18%である(以下本稿でのべる数値は全て12頁の表にまとめてある)。

## 2. 3. 各動詞毎の用例実態

### 2. 3. 1. 配置動詞

配置動詞は229例あり、この用例中、行為の対象にガ格表示があったものは、155

---

\*4 本稿では、各動詞のテアル構文における、数的には少数派であるガ格構文のヲ格、ヲ格構文でのガ格を、それぞれの動詞構文の派生形としている。

例（ガ、ヲの格表示された配置動詞例文の 82.4%、以下他の動詞でも同じ）で、ヲ格をとったものが 33 例ある\*5。配置動詞の例文を示す。

(7) 入り口に近い軒下に、スコップが 1 つと、取手のついた石油罐が二つ、べつに、並べてある。 (砂)

配置動詞は主に非情物の配置・設置を意味するもので、用例が多かったものは、順に、「置く」(39例、以下同じ)、「貼る」(17)、「入れる」(11)、「並べる」(10)、「掛ける」(8)、「しまう」(6)、「付ける」(5)、「飾る」(5)、「貼り付ける」(5)、などである。

### 2. 3. 2. 出現動詞

出現動詞は 218 例あり、この用例中、行為の対象にガ格表示があったものは、93 例 (91.2%) で、ヲ格をとったものが 9 例ある\*6。出現動詞の例文を示す。

(8) 一番古い日記の一番初めに、そのことが書いてあるわ。 (雪)  
出現動詞で用例が多かったものを順に示すと、「(文字、文章などを) 書く」(143)、「記す」(23)、「彫る」(4)「描く」(4)、「しつらえる」(4)、「用意する」(3) などである。

### 2. 3. 3. 質的・形状的变化動詞

質的・形状的变化動詞は 42 例あり、この用例中、行為の対象にガ格表示があったものは、9 例 (60%) で、ヲ格をとったものが 6 例ある\*7。質的・形状的变化動詞の例を示す。

(9) 深度が調整してあるので、目標の艦艇を走り抜けはするが、 (山本)  
質的・形状的变化動詞で用例が多かったものを順に示すと、「縛る」(3)、「干す」(2)、「改める」(2)、くける (2) 染める (2) などである。

---

\*5 配置動詞がヲ格をとった例文を示す。

一間きりの部屋に、年じゅう寝具を並べてあるような旅館だった。 (青春)

\*6 出現動詞がヲ格をとった例文を示す。

彼は、ここにはいってきってから四十三篇の詩をつくり、それをすべてノートに書きとめてあった。 (冬)

\*7 質的・形状的变化動詞がヲ格をとった例文を示す。

そのために、台所の窓をわざわざ開け放ってある。 (女社長)

### 2. 3. 4. 状態存続動詞

状態存続動詞は 16 例で、行為対象にヲ格をとったものは 7 例 (77.8%) で、ガ格をとった派生形 (=益岡 1987 のいう中間型) が 2 例ある\*8。状態存続動詞の例文を示す。

(10) お婆さんを一人残してあるんですって、 (雪)

状態存続動詞を用例の多かった順に示すと「預ける」(5)、「(部屋等を) とる」(4)「予約する」(2)、「確保する」(1)、「残す」(1)、「保管する」(1)、「備える」(1)、「挙げる」(1) である。

### 2. 3. 5. 処置動詞

処置動詞は 92 例あり、対象にヲ格をとったものは 21 例 (80.8 %) で、ガ格をとったもの (派生形) が 5 例ある\*9。処置動詞の例文を示す。

(11) あのマンションを抵当にいれて、五百万円を叔父に都合してあるの。

(女社長)

処置動詞を用例の多かった順に示すと、「(「伝える」の意の) 言う」(9)、「話す」(5)、「決める」(4)、「伝える」(3)、「(手を) 打つ」(3)、「任せる」(2)、「考える」(2)、「説明する」(2) などがある。

## 2. 4. テアル構文の格について

3. 3. でもふれたが、配置、出現、質的・形状的变化動詞で、ガ格の他にヲ格をとる用例が、また、状態存続、処置動詞でヲ格の他にガ格をとる用例が、少数ではあるがみられる。ここで各上接動詞のガ、ヲ格構文とその意味を以下の表にまとめてみた (これを表 1 とする)。

---

\*8 状態存続動詞でガ格をとった例を示す。

その例証として彼が見聞した 3 つの事例が挙げられている。 (山本)

\*9 処置動詞でガ格をとった例を示す。

安田の北海道旅行は、いかにも後から調べられることを予想したような手が歴々と打ってあった。 (点)



表 1

	格	結果状態 (A型)	結果事態存続 (B1型)	基準時の有効性 (B2型)
配置動詞	ガ	○		
	ヲ		◎	
出現動詞	ガ	○		
	ヲ		◎	
質的・形状的 変化動詞	ガ	○		
	ヲ		◎	
状態存続動詞	ガ	◎		
	ヲ		○	
処置動詞	ガ			◎
	ヲ			○

表 1 中の◎は本稿でいう派生形である。配置、出現、質的・形状的变化、状態存続の各動詞は、行為対象に対して何らかの変化を被らせるという、変化性ともいべき共通の性格をもつ。それらの4つの動詞のうち、状態存続動詞は、次例のように、

(12) 堀米は太刀を、不二楼の屋へあずけてある。 (剣客)

(13) フロントで聞くと作家が僕の部屋をとってあるということだった。 (聖)

ヲ格構文中に「動作主+ガ」句の共起が自然であり (12) では無題化すれば、ガ格が現れる)、一方、他の3動詞のヲ格構文 (派生形) は、以下の例文 (作例) で示すように、「動作主+ガ」句の共起が不自然なので<sup>\*10</sup>、この点で他の3動詞とは異なっている<sup>\*11</sup>。

(14) ?花子が、食器をテーブルの上に置いてある。 (配置動詞)

(15) ?太郎が、名前を氏名の欄に書いてある。 (出現動詞)

(16) ?花子が、食器を棚の上に洗ってある。 (質的・形状的变化動詞)

\*10 (14)～(16) はガをハに換えて主題化しても不自然さは変わらない。金水 2000 によれば、処置動詞のヲ格テアル構文では「動作主 (=経験主) +ハ」が典型である、とのべている。

\*11 益岡 1987 によれば、他の3動詞の構文は視覚的に可能な「場面描写表現」とでも呼ぶべき性格をもっている。一方、「預ける」「残す」「確保する」などの状態存続動詞の構文は行為の結果が眼前に顕れる事はないので、この「場面描写表現」の性格は状態存続動詞構文には欠けているように思える。

また、上の表でもわかるように、処置動詞以外の動詞は格表示を変えることにより、アスペクトの意味を変えることができるが、処置動詞は格表示を変えてもアスペクトの意味は変わらない（同一動詞「(手を) 打つ」による注 9 (ガ格) と (34) の例文 (ヲ格) を参照)。これは処置動詞のもつ、行為が対象に対して何ら変化を被らせることがない、という、非変性性ともいうべき、性格に起因するようである。処置動詞の格の交替は、他の動詞とは異なる事情によるものと思われる。

### 3. テアル構文と存在文の近似性

#### 3. 1. 存在文の特徴

アスペクト補助動詞「テアル」は、接続助詞「テ」に存在動詞「ある」を源とする「アル」から構成されているので、テアル構文が存在動詞「ある」を含む空間的存在文（以下では「空間的」を略する）と何らかの関係にあることは、容易に想像されることである。この関係をテアル上接動詞との組合せで考察してみる。

例えば、その「ある」より構成された次の存在文についてであるが、

(17) 辞書がある。

は、「発見」などの特殊な場合を除いては、不自然な文であり、どうしても次例のように、

(18) 辞書がそこにある。

場所を示す二格句（以下「場所二格句」と略す）があつて、はじめて完全な文となる。つまり「～がある」という存在動詞には、「～が」にあたる存在物と共に、場所二格句は文構成上の必要成分（＝項）といえる。

#### 3. 2. 近似性の尺度

存在文の必要成分である場所二格句を用いて、テアル構文の上接他動詞が単独で述語となる文（以下この文を単独他動詞文と略す）や、「～がある」文を用いて、テアル構文と存在文との近似性を次の4つの段階に分け、これを近似性を計る尺度とした。

- (I) 場所二格句は、単独他動詞文の必要成分であり、テアル構文でも必要成分となりえる。
- (II) 場所二格句は単独他動詞文の必要成分とはなりえないが、統語的にはテアル構文に存在の意味がある。
- (III) 場所二格句は単独他動詞文の必要成分となりえるが、統語的にはテアル構

文には存在の意味はない。しかし、結果として、間接的にはあるが存在の意味が生ずることとなる。

(IV) 場所二格句は単独他動詞文やテアル構文で必要成分となりえず、テアル構文にも存在の意味がない。

(I) の動詞で構成されるテアル構文は、存在文と同様存在に関わるものであり、存在文的表現（以下では「存在表現」と略す）を示すといえるだろう。(II) の動詞で構成されるテアル構文も、統語的には存在表現に近いものといえるだろう。(III) の動詞で構成されるテアル構文は、統語的には無理であるが、結果的意味において存在表現と近いものになるだろう。(IV) の動詞で構成されるテアル構文については、この構文に存在文との関連を見出すことは無理と思える。

ここに示された4つの尺度は、(I) (II) (III) (IV) の順で存在文との近似性が小さくなる（(I) が最も大きく、(IV) が最も小さい）。これらの尺度を用いて、上接動詞毎にテアル構文と存在文との近似性をみていく。

#### 4. テアル上接動詞の近似性

以下2. 3. 1. ~2. 3. 5. でのべてきた5種類の動詞毎に、これらの動詞が上接するテアル構文と存在文との近似性についてみていく。なお、以下では派生形は扱わない。

##### 4. 1. 配置動詞の近似性

テアル上接動詞のうち、例文(7)の配置動詞「並べる」の単独他動詞文で場所二格句との関係を見てみると、

(19) ?スコップ1つと、取手のついた石油罐を並べた。

(20) スコップ1つと、取手のついた石油罐をそこに並べた。

となり、「並べる」は場所二格句を必要成分とするといえる。採取した他の主な配置動詞「置く」「貼る」「並べる」「入れる」「掛ける」「しまう」「付ける」などについても同じことがいえる。

配置動詞のテアル構文の例文を示す。

(21) 翌月、出社した伸子は、自分のデスクに、一通の白封筒が置いてあるのを見た。 (女社長)

例文(21)の「自分の・・置いてある」は、次の2文(a) (単独他動詞文) と(b) (「~

がある」存在文)が\*12、

- (a) (誰かが)自分のデスクに、一通の白封筒を置いた。
- (b) 自分のデスクに、一通の白封筒がある。

場所二格句(「自分のデスクに」)という共通項で括られることにより、「～テ」形の形成を経て、構成されたものと思える。このように場所二格句はテアル構文においても、文構成上必要成分であるので、配置動詞のテアル構文は、近似性の尺度では(I)にあたるものであり、「存在表現」といえる。

実際の配置動詞のテアル構文をみると、配置動詞のテアル構文229例のうち、153例(66.8%)に場所二格句があった。このことは、配置動詞と場所二格句とに何らかの結びつきがあることを示しているものと思える\*13。

#### 4. 2. 出現動詞の近似性

例文(8)の出現動詞「書く」の単独他動詞文で場所二格句との関係を見てみると(対象は「名前」に変えてある)、

- (22) ?名前を書いた。
- (23) 名前をそこに書いた。

となり、動詞「書く」を単独の述語とする文では、場所二格句は必要成分であるといえる。このことは他の出現動詞である、「記す」「彫る」「描く」「しつらえる」「用意する」などについても同じことがいえる。出現動詞のテアル構文の例文を示す。

(24) この店には、ルーレット、麻雀が出来るような場所が設けてあった。(冬)  
例文(24)は、次の2文(c)と(d)が、

- (c) この店に(は)、ルーレット、麻雀が出来るような場所を設けた。
- (d) この店に(は)、ルーレット、麻雀が出来るような場所があった。

場所二格句(「この店に」)という共通項で括られることにより、「～テ」形の形成

---

\*12 以下(c)～(j)でも同じペア(単独他動詞文と空間的存在文)の組合せでみていく。

\*13 実際のテアル構文では、場所二格句は文脈や構文上略される場合もある。次例でその例を示す(例文中の「そこに」が略されたと思われる場所二格句である)。

すぐわきに、階段があって、(そこに)紙が貼ってあり、部屋の図面と住民の名前が書いてある。(女社長)

このような場所二格句はカウントされていない。従って、場所二格句の数の多少は、テアル構文と存在文との関係の有無を示す1つの目安であると考えている。

を経て、構成されたものと思える。このように場所二格句はテアル構文においても、文構成上必要成分であるので、出現動詞のテアル構文も、近似性の尺度では(I)にあたるものであり、「存在表現」といえる。

実際の出現動詞のテアル構文をみると、出現動詞のテアル構文 218 例のうち 101 例(46.3%)に場所二格句がみられた。このことは場所二格句と出現動詞テアル構文とに何らかの結びつきがあることを示しているものと思える。

#### 4. 3. 質的・形状的变化動詞の近似性

例文(9)の「調整する」で単独他動詞文と場所二格句との関係を見てみると、

(25) 深度を調整した。

(26) \*深度をそこに調整した。

となり、動詞「調整する」は、場所二格句と共起しない。このことは他の質的・形状的变化動詞である、「縛る」「干す」「改める」「くける」「染める」「開け放つ」「潰す」などにも当てはまる。質的・形状的变化動詞の例文をみってみる。

(27) 灰皿には、三本のすいがらが押し潰してあった。 (青春)

例文(27)の「灰皿に・・潰してあった」は次の(e)と(f)から、「～テ」形の形成を経て、構成されていると思える。

(e) 三本のすいがらを押し潰した。

(f) 灰皿に、三本のすいがらがあった。

場所二格句(「灰皿に」)は(e)(f)の共通項ではないので、テアル構文においては、文構成上必要成分とはなりえない。しかしながら例文(27)のように、場所二格句をとった場合、テアルの「ある」の存在により、構文は「-に、～がある」という形になり、統語的には存在の意味が生ずる。このように、質的・形状的变化動詞のテアル構文は、近似性の尺度の(II)にあたるものである。

実際の質的・形状的变化動詞のテアル構文をみると、この動詞のテアル構文 42 例のうち 5 例(11.9%)にのみ場所二格句がみられた。場所二格句は質的・形状的变化動詞のテアル構文においては必要成分でないので、この 5 例の場所句は、「～である」の「ある」に応じて置かれたオプショナルなものと思える。次例は場所二格句のつかない例である。

(28) そこのところだけ白手袋がくけてあった。 (山本)

#### 4. 4. 状態存続動詞の近似性

例文(10)の動詞「残す」の単独他動詞文と場所二格句との関係を見てみると、

(29) ? お婆さんを残した。

(30) そこに、お婆さんを残した。

となり、動詞「残す」は、場所二格句を必要成分とするといえる。このことは他の状態存続動詞である、「あずける」「(部屋等を) とる」「確保する」「(ホテル等を) 予約する」「保管する」などについても同じことがいえる。状態存続動詞の例文を示す。

(31) なにやらうわさにきく美濃の深芳野さまや小見の方とやらには、ごく一時だけ、旦那さまをあずけてあるだけで、 (国盗)

例文(31)は次の(g)と(h)から、「～て」形の形成を経て、構成されているものと思える。(h)の文自体は非文であるが、「～て」の加わったテアル構文は文として成り立つ。

(g) 美濃の深芳野さまや小見の方とやらに (は)、 旦那さまをあずけた。

(h) \* 美濃の深芳野さまや小見の方とやらに (は)、 旦那さまをある。

場所二格句は(g)の単独他動詞文の必要成分となり、またテアル文構成上必要成分であるが、(h)の場所二格句を含んだ存在文は非文となるので、(31)には統語的には存在の意味はなく、「結果の事態の存続」を表す。しかしながら(31)は、結果として、間接的ではあるが、「行為の結果としての存在状態」(=美濃の深芳野さまや小見の方とやらに、旦那さまがあずけてある)の意味を生ずる。このような状態存続動詞のテアル構文は、近似性の尺度で(Ⅲ)にあたるものである。

実際の用例をみると、この動詞のテアル構文16例のうち4例(25%)にしか場所二格句がみられなかった。これらの用例数から見ると、場所二格句と状態存続動詞のテアル構文との結びつきは、場所二格句が状態存続動詞の単独他動詞文の必要成分であるにもかかわらず、配置動詞や出現動詞ほど強くないようである。このような、実際の用例に見られる状態存続動詞のテアル構文と場所二格句との結びつき状況がいかなる理由によるものなのか、は現在のところ不明である。

#### 4. 5. 処置動詞の近似性

例文(11)の「都合する」の単独他動詞文と場所二格句との関係を見てみると、

(32) 五百万円を叔父に都合した。

(33) \*五百万円を叔父にそこに都合した。

となり、動詞「都合する」は、場所二格句がなくとも、文が成り立つし((32))、また場所二格句とは共起できない((33))。このことは他の処置動詞である、「(「伝える」の意の) 言う」「話す」「決める」「伝える」「(手を) 打つ」「任せる」「考える」

「説明する」などについても同じことがいえる。処置動詞の例文を示す。

(34) 私がなじると、崔はもう手を打ってあるから心配するなど言った。（一瞬）  
例文(34)の「手を打ってある」は、次の2文(i)と(j)がいずれも場所二格句とは結びつきがないので、

(i) \*そこに手を打った。

(j) \*そこに手がある。

処置動詞のテアル構文の「ある」には全く存在の意味がないことになる。このことから処置動詞が上接するテアル構文は、存在文とは関係のない非存在表現であり、3. 2で示した存在文との近似性でいえば、尺度の(IV)にあたるものである。実際に処置動詞のテアル構文をみると、この動詞のテアル構文92例に場所二格句は2例(2.1%)しかみられなかった<sup>\*14</sup>。このことは、この動詞のテアル構文と場所二格句とは結びつきがないことを示しているものと思える。

## 5. 本稿のまとめ

### 5. 1. 動詞毎の存在文との近似性

本稿はテアル構文において、テアル構文に上接する動詞を、配置動詞、出現動詞、質的・形状的变化動詞、状態存続動詞、処置動詞の5つに分け、動詞毎にこれらの動詞のテアル構文と存在文との近さをみていこうとしたものである。具体的には場所二格句の、これらの動詞の単独他動詞文における共起関係に基づいて、テアル構文と存在文の関係を考察した。その結果、

- ① 配置動詞と出現動詞の上接するテアル構文は、存在文と同様、存在表現といえるものである。
- ② 質的・形状的变化動詞と状態存続動詞の上接するテアル構文は、統語上、または、意味上存在表現に近いものであるといえる。
- ③ 処置動詞の上接するテアル構文は、存在文との近さがみられぬ非存在表現ともいえるものである。

ということを明らかにした。

---

\*14 場所二格句のついた処置動詞構文の1例を示す。

数日前、西部軍当局の発表に、一中略一体を露出させてはならぬと警告してあった。(黒)

## 5. 2. テアル構文の動詞の構成

以上のべてきたことを踏まえて、テアル上接他動詞毎に、存在文との関係、用例数、場所二格句数、およびガ格、ヲ格用例数などを表にして示した(これを表2とする)。

表2

動詞	存在文との関係	動詞数	用例 (a)	場所二格句 (b) (b/a)	ガ (c) (c/c+d)	ヲ (d) (d/c+d)	ハ・モ
配置	存在表現	86	229 (38.4%)	153 (66.8%)	155 (82.4%)	33 (17.6%)	25
出現	存在表現	35	218 (36.5%)	101 (46.3%)	93 (91.2%)	9 (8.8%)	21
質的・形状 的变化	存在に近い表現	33	42 (7%)	5 (11.9%)	9 (60%)	6 (40%)	19
状態存続	存在に近い表現	8	16 (2.7%)	4 (25%)	2 (22.2%)	7 (77.8%)	3
処置	非存在表現	59	92 (15.4%)	2 (2.1%)	5 (19.2%)	21 (80.8%)	25
合計		221	597 (100%)	264 (44.2%)	264 (77.6%)	76 (22.4%)	93

表2中の数字は、全て本稿の中でべたものがほとんどである。場所二格句の欄のかわりかこの数字は、動詞毎の、用例数に対する場所二格句を含んだ用例数の比である。ガ、ヲの欄のかわりかこの数字は、動詞毎の、ガ・ヲの格表示のある用例合計数に対する、ガ格およびヲ格句を含んだ用例数の各々の比である。

テアル構文において存在文に最も近い存在表現を表しえる配置動詞、出現動詞の用例の合計は447で、全他動詞用例の74.9%（自動詞を含めた全用例数の73.8%）である。これに存在に近い表現を表しえる質的・形状的变化動詞と状態存続動詞の用例も加えると、合計505例となり、全他動詞用例の84.6%（自動詞を含めた全用例数の83.5%）が存在文に近いテアル構文を構成しえる動詞で構成されていることになる。また、格が示されている配置、出現動詞290例のうちで、実際にガ格をとっているものは248例であり、これは格が示されている他動詞総用例の73%にあたる。この他、自動詞でガ格をとっているものが2例あるので、これを含めれば、ガ



格表示されているテアル構文の 72.5%が存在文に最も近い存在表現であるといえよう。しかしながら、確実に存在表現といえるこの 248 例は、自動詞を含めたテアル構文全用例数からみれば、41%ほどのものでしかないことも事実である。

#### 参考文献

- 大場美穂子 1996 「「～てある」について」『東京大学言語学論集』15
- 金水 敏 2000 「1 時の表現」『日本語の文法2 時・否定と取り立て』岩波書店 2006 『日本語存在表現の歴史』ひつじ書房
- 杉村 泰 1996 「形式と意味の研究－テアル構文の2 類型－」『日本語教育』91号
- 副島健作 2007 『日本語のアスペクト体系の研究』ひつじ書房
- 高橋太郎 1969 「すがたともくろみ」教育科学研究会テキスト（1976に『日本語動詞のアスペクト』金田一春彦編（むぎ書房）に再録）
- 林 璋 1992 「助詞の意義と用法の体系－格助詞「に」を中心に－」『文化言語学－その提案と建設－』文化言語学編集委員会編（編）三省堂
- 益岡隆志 1987 「第4部 第2章 テアル表現の意味領域」『命題の文法』くろしお出版
- 益岡隆志 1992 「日本語の補助動詞構文－構文の意味の研究に向けて－」『文化言語学－その提案と建設－』文化言語学編集委員会（編）三省堂
- 森田良行 1977 『基礎日本語文法』角川書店
- 森田良行 1994 『動詞の意味論的文法研究』明治書院
- 吉川武時 1971 「現代日本語動詞のアスペクトの研究」『Monash 大学紀要』（1976）に『日本語動詞のアスペクト』金田一春彦編（むぎ書房）に再録）
- Marants.A. 1984 *On the Nature of Grammatical relation* Linguistic Inquiry Monograph 10 MIT Press. Cambridge

<例文引用文献> (下線部は本稿例文出典名)

『CD-ROM版 新潮文庫の100冊』(発行:新潮社)より

『女社長に乾杯』(赤川次郎著 1967年) 『劍客商売』(池波正太郎著 1973年)

『砂の女』(阿部公房著 1962年) 『点と線』(松本清張著 1971年)

『山本五十六』(阿川弘之著 1965年) 『雪国』(川端康成著 1948年)

『青春の蹉跎』(石川達三著 1968年) 『華岡青洲の妻』(有吉佐和子著 1966年)

『黒い雨』(井伏鱒二著 1970年) 『聖少女』(倉橋由美子著 1965年)

『一瞬の夏』(沢木耕太郎著 1981年) 『冬の旅』(立原正秋著 1969年)

『国盗り物語』(司馬遼太郎著 1966年)

かみなが せいし／人文社会科学研究所  
(2008年10月30日受理)